

片倉鶴陵 医案④

文化六年己巳八月十日、胡蘆齋某先生、書を致して謂いて云く、「長女清容、曩歳浅草金杉街、旭山楠太郎が長子蔬次郎に嫁せしむ。

然るに、中夏の始め病を得て、淹延積月、諸薬応ぜず、肌瘦神瘁す。仍て昨日帰寧せしむ。願くは、今日黄昏来診して高案を示せ。七鼓の後、カゴを致して相邀うべし」と。

予、報じて曰く、「愛玉、病んで久しく床枕に在るを以て診視を求め給う。僕、今日数家の患者を省するの次いで、東叡山下木阿弥某に往く。其の帰路、貴邸へ造らば、必らず来教の期に違わじ。請う、僕頰を煩わすことなかれ」と。

乃ち、往きて其の病由を詢うに、乃ち云わく、「女、年十九。今年五月の初、微邪に感じて少しく頭痛・悪風・咳嗽・咽痛す。発表の剤を用ゆること数日にして稍瘥ゆ。是より其の後、微熱往来して時々下利す。盖し、湿邪に感じ、胃中和せずと為して、不換金、除湿湯等消息して用いること浹旬。前症愈えず、荏冉として下利正さず、昼夜五六行、或いは七八行。月余に

及んで炎暑に向かうを以て、加味五苓散、平胃六一散、或いは連理湯の類並びに皆効かず。疲倦、日に増す。

日晡潮熱、飲餌美ならず、月経調わず、脈細数。明所を悪んで暗室を好み、人と応対することを嫌い時々咳嗽し、五心煩熱、盗汗出でて幾んど勞瘵の候なるを以て、固陽湯、竹葉飲に五味子・別甲の類を加え与うるも、前症漠然として減ぜず。乃ち高良姜湯、固陽散等の渋劑、其の他止瀉の九散、毫末も効無し。已に四閱月、頃日褥上に起居すること能わざるに至る。足下、詳察審視して高案を示せ」と。

余、之を診するに、肚腹蒸蒸として熱し、小腹の右辺に中り一小塊あり、之を按ぜば微しく痛む。寝れば舌上乾燥し、脈沈数にして稍緩を帯ぶ。

予、脈証・腹候を照らして考うるに、眞の骨蒸勞熱に非ず。又下利止まざること累月と雖も、脾胃虚憊の候と為すべからず。既に消導・滲利・温補・固腸・止瀉の劑を用いて、並びに皆効なき者は、此の病、寒熱不調より起こり、必ず虚中に実を夾んで下利する者なり。乃ち方を疏す。

本事方の温脾湯を日に三貼、毎朝乾姜円七粒を用ゆべし。此の円は七日にて止むべし。夫れ煎劑に大黄あり、丸薬も亦巴豆・大黄の駿下あつて、数月の下利に投ずる、畏るべきに似ると雖も、此の方を用いずんば、

下利止むべからず。下利止まずんば諸症愈ゆること能わず」と言え、先生駭然として曰く、「女、疲倦すること甚し。駄薬慮らざるべけんや」。

予曰く「処剂に大黄の苦寒有ると雖も、又附子・乾姜・桂枝の辛温あり。丸薬に巴豆・大黄の斬関奪門の攻撃ありと雖も、亦人参・乾姜の補氣・回陽・益脾の品を配合す。此れ則ち、熱湯へ冷水を合して寒温に適し、口に爽うと同理にして、寒熱不調より発したる病ゆえ、特に温補の薬品のみ主とすれば、熱湯ばかりにして、程能きかげんに非ざるが如し。

今、巴豆・大黄の駿攻へ、参附・乾姜の温補を合すれば、攻補偏ならずして、寒と熱と不調の病因の場へ、しつくりと相適うゆえ、補中に瀉下の薬あつて、不調自ら調和す。是れ、大便を下す薬を用いて下利を止めるの妙義なり。王好古云わく、巴豆、炒去烟、令紫黒、用可以通腸、可以止瀉。世の知らざる所なり。云々……」。

然れども、先生、姑息の愛、容易に予が論に服せず。猶狐疑して決せず。

予曰く「然らば則ち本事方を見るべし」と。遂に乃ち其の子弟を呼んで其の書を出さしめ、彼の條を読むこと一過、其の「治服諸薬不効」の語、及び「宜先取去、然後調治、易差、不可畏虚、以養病也」の文を

読むに至りて、釈然として疑團始めて氷の如く解け、予が方書を読んで意を用いるの浮ならざるを称歎し、竟に二方を用いること三日。下利滑便多く圍に上るは三分の一を減じ、頗る情意爽なり。

然れども、舐犢の愛、巴豆・大黄の攻撃を連服するを畏れ、乾姜円を止め、温脾湯の大黄を去りて之を服すること二三日。又大便下利六七行。

予往きて診して曰く、「恐らくは治方を改むるに非ずや」と詳に詰えば、其の側室、駿薬を懼るるを以て、是に由つて止むことを得ずして、丸薬を止め、本方の大黄を去ると云々……。予、力を竭くし、勉強して法の如く前剤を服せんことを薦む。

因て再び之を用いること六七日。大便行数、日に減じて後、糞を見るに至る。是に於いて乾姜円を止め、猶、前剤の大黄を減じて服すること十有余日。諸症、漸漸に平にして、飲食日に進む。唯、羸瘦未だ復せず。養血補脾の剤を以て、調理二月にして全く安し。

先生大いに喜んで曰く、「老手識練に非ざれば、此くの如きの症候に臨んで、巴豆・大黄の駿薬を用いることを得んや」と。「後略」